歴史館だより

伊達輝宗供養塔（左）と義姫逆修供養塔（右）　高野山（写真提供／仙台市・保春院）

- 伊達政宗の母義姫（保春院）の最晩年（後編）
- 博物館とデジタルアーカイブ
- 新・最上義光連歌の世界②
- 最上義光歴史館サポーター「義光会だより」No.15
- 山形・山寺・最上義光（位牌）の御霊屋について（後編）

No.32
2025年3月発行
最上義光歴史館

伊達政宗の母義姫（保春院）の最晩年（後編）

佐藤憲一

贈答歌

二十八年振りに仙台で再会した二人の心中はどのようなものであったか。再会して間もない頃と推測される二人の贈答歌が、政宗自筆の歌集「貞山様御筆御歌」（仙台市博物館蔵）に記されている（写真1）。

写真1　伊達政宗筆「貞山様御筆御歌」　仙台市博物館蔵

年月久しうへだゝりける母にあいて
あひ〳〵て心のほどやたらちねの
ゆくすゑひさし千とせふるとも

母の返し
二ばよりうへしこまつの木だかくも
えだをかさねていく千世ノやど

政宗の和歌の心は、二十八年振りにお母さんにお会いして心の内を述べるならば、お母さんにはいつまでも元気で長生きしてほしいと願うだけだ、というもの。一方、母の歌は、幼い頃から大切に育ててきた松の木が今や大きくなって幾重にも枝を張り立派な松になった。その下に行ってこれからお世話になるのだ、という喜びだろう。言うまでもなく松は政宗である。

実はこの母の返歌で思い出される和歌がある。政宗の父輝宗が書いた和歌色紙（写真2）である。

二葉よりたのもしきかなかすが山
こだかき松のたねとおもへば

この色紙は政宗が、父の形見として大事にしていた輝宗自筆の書状（政宗宛）と一緒に保管していたもの。[1] 後に二つとも息子の伊達忠宗（政宗の次男、仙台藩二代藩主）に譲っている。

写真2　伊達輝宗筆「和歌色紙」　仙台市博物館蔵

和歌は『拾遺和歌集』に収められた大中臣能宣（おおなかとみのよしのぶ）（九二一～九一）の和歌である。その心は、栄華を誇る藤原氏の御子の誕生を祝い、藤原氏の若君だと思うと、幼くとも頼もしく見える、というもの。輝宗がこの色紙を、いつ、どのようなときに書いたかは未詳だが、わが子政宗の誕生を祝い、その成長と将来への期待を込めて書いたもの、とも推測される。伊達氏も本姓は藤原である。

母の返歌はこの能宣の和歌を踏まえたものではなかったか。輝宗は当然この色紙を義姫にも見せていたと思われる。能宣の和歌は輝宗、義姫、政宗親子にとって忘れることのできない思い出の和歌だったに違いない。義姫の返歌に、政宗の母としての誇りが感じられるのはそのためだろう。

政宗との別れ

仙台での再会を喜び合った二人だが、年が明けて元和九年（一六二三）四月十七日政宗は仙台を発って江戸へ上る。将軍徳川秀忠、家光親子に供奉して上洛するためであった。仙台を発つ一カ月前、母に宛てたと思われる手紙[2]が「伊達家文書」に残されている（写真3）。

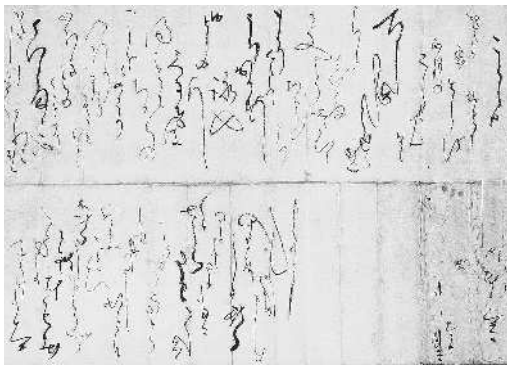


写真3　伊達政宗自筆消息　こし□宛
（元和9年ヵ）3月12日　36.4cm×52.5cm　仙台市博物館蔵

従来注目されることのなかった手紙なので、全文と訳文を掲げる。

御ほしめしよせられ、御文ことに
ちうのうち、うちおかす詠入まいら
せ候。まことに、ちか〳〵の、のほ
りにて御さ候まゝ、御いとまこい
かれこれ』しかう申候て、申上たく
候へとも、いかにもすき御さなく候
まゝ、わたくしなから、御ゆるしな
されへく候。かしく。
ことしハゑとにとしをこし申候ハ
んまゝ、きたる春正月のうちにハ、
御いとましたいに、まかりくたり
候へく候。御としのうへなれは、
一しほ御のこりおほきとの御こと
ハり、かたしけなく、』時ならぬ
袖に、しくれをもよをし申事にて
候。くハしく、こせうかたより申
上まいらせ候。めて、かしく。
「三月十二日　（墨引き）
こし□殿　　むつのかミ
御申　　」

〔訳〕

心のこもったお手紙をいただき、また重の内、早速拝見いたしました。本当に近々江戸へ上らなければなりませんので、お暇乞いに伺候して色々申し上げたいのですが、どうにも隙がなく、勝手ではございますが御ゆるしください。かしく。

今年は江戸で年を越すことになりそうです。来年の春正月には、（将軍から）お暇をいただき次第仙台に帰るつもりです。年を取ってしまったので、（そなたに直接会って挨拶ができないのは）一入残念であるとのお言葉、身にしみて有難く、思わず涙を流してしまいました。詳しくは、小少将方より申し上げます。めでたく、かしく。

宛名の「こし□」は母義姫の侍女か。文中の「こせう」は母の侍女小少将と思われる。「こし□」は、あるいは政宗と母の取次役か。文中に「すき御さなく候まゝ」とあるのは、将軍秀忠・家光親子の春中の上洛が予定されており、上洛の日取りが決まり次第、政宗は直ぐに江戸に上り上洛に供奉するつもりであった。[3] このため二月頃から待機中で、母のもとへ伺候する余裕がなかったものと思われる。母からは、年寄でもありこれが最後かもしれないので、江戸へ発つ前に是非一度お会いしたいとの意向が伝えられたのだろう。政宗も同じ気持であった。「かたじけなく、時ならぬ袖に時雨を催し申す事に候」と感涙している。

政宗は四月二十五日に江戸に着き、将軍秀忠・家光親子に供奉して上洛。江戸出立は五月十六日、京都着は六月八日であった。政宗は供奉する大名達の先駆を命ぜられ、一番に上洛を果たす。息子忠宗も同行した。この手紙が仙台での母との最後の別れとなった。

母の死は七月十六日。享年七十六。母の訃報を政宗は京都で受け取った。追悼の和歌二首が残されている（「貞山公治家記録」）。

立さりて浮世の闇を遁れなば
　心の月や猶も曇らじ
鳴虫の声を争ふ悲みに
　涙の露ぞ袖にひまなき

愛姫や孫たちとの交流

仙台での約十カ月間の短いくらしの中で、義姫は江戸にいる政宗夫人愛姫（一五六八～一六五三）や孫たちとも交流している。義姫から手作りの提げ袋を贈られた愛姫は「お贈りいただいたお母様お手製の提げ袋、その美しさに見惚れています。このように立派にお作りになられるのですから、さぞや御目も達者であられることと、提げ袋を眺めながら喜んでおります。このように見事で美しい提げ袋は見たことがありません。感激しております」（意訳）と手紙[4]で述べている。姑として嫁に対する細やかな気遣いが窺がえて微笑ましい。

愛姫が豊臣秀吉の人質として政宗、義姫と別れ米沢から上京するのは天正十八年（一五九〇）、二十三歳のとき。その後徳川家康の人質として江戸に移り、以後死ぬまで仙台に来ることはなかった。従って、二人は米沢で別れてから一度も会うことはなかったのである。

孫たちとの交流も、元和九年六月五日上洛途上の政宗に宛てた手紙[5]では、江戸にいる忠宗夫人振姫（徳川秀忠の養女、実は池田輝政の娘）の出産が間近と聞き、お付きの者たちと相談して安産祈願の御守を送り届けたことを知らせている。また、千勝丸（政宗の十男、後の宗勝。当時、三歳）が賢く、立派に育ち、千勝丸が住む屋敷の造作も順調に進んでいるので安心するように、と述べている。

同じく七月六日牟宇姫（政宗の次女。当時、十六歳）に宛てた手紙[6]（写真4）では、病気の見舞いに対するお礼を述べている。牟宇姫は伊達家の重臣、角田（宮城県角田市）の石川家に嫁いだ。夫は石川宗敬である。この時、義姫は口の中を傷め臥せっていたようである。心配した牟宇姫は祖母が病気と聞き見

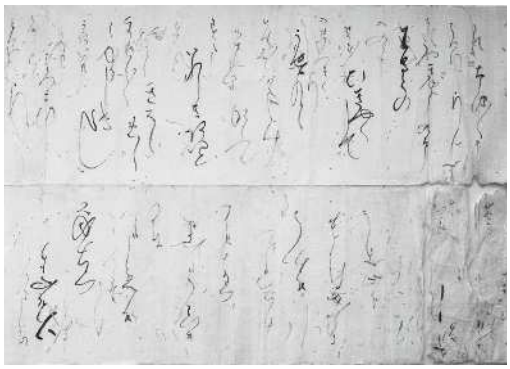


写真4　義姫消息（侍女小宰相代筆）　牟宇姫宛
（元和9年）7月6日　34.2cm×47.2cm　角田市郷土資料館蔵

舞状を出したのだろう。可愛い孫娘の気遣いに「薬など用いたら、そろそろ良くなりましたのでご安心ください」と述べている。しかし、心配した牟宇姫は夫の宗敬に直接義姫を見舞わせている。七月八日付の牟宇姫宛の手紙[7]で「わざわざお見舞いいただき恐縮しております、くれぐれも民部（宗敬）殿によろしくお伝えください」と感謝している。

義姫の手紙はいずれも侍女小宰相による代筆である。石川家には牟宇姫に宛てた義姫の手紙が九通あったと記録されているが、今はこの二通しか残っていない。義姫が黄泉へと旅立つのは、この八日後である。

保春院の諡号について

義姫の遺骸は仙台北山にある伊達輝宗の菩提寺、臨済宗覚範寺で荼毘に付され、その地に埋葬された（写真5）。

写真5　義姫（保春院）の墓　　仙台市北山 覚範寺

導師を務めたのは覚範寺の清嶽宗拙（一五六四～一六四四）である。清嶽は伊庭惣八郎といい政宗の家臣であったが、同輩を斬って逃亡。その後政宗の師である虎哉宗乙（一五三〇～一六一一）の法嗣となり、虎哉が開山となった覚範寺の第三世となった。政宗の信頼大きく、後に政宗の母の菩提寺保春院の開山となり、また政宗の菩提寺瑞鳳寺の開山も務めた。政宗の葬儀の導師も務めている。

義姫の法名、保春院殿花窓久栄尼大姉を授けたのも清嶽である。「貞山公治家記録」（元和九年七月十六日の条）には次のように記されている。

去年九月以後今年ニ至リ、月日不知、落飾シ玉ヒ、覚範寺清岳和尚御院号法名ヲ奉ラレ、保春院殿花窓久栄尼大姉と号セラル、且ツ御寿像ノ賛アリ、其詞ニ云ク、脱却羅綾錦繍紗、法身堅固仏袈裟、念珠百八秘持呪、永保春風却外花

これによると、義姫が落飾し保春院を号するのは仙台に帰ってから死までの間となる。しかし、義姫が生前に自ら「保春院」を号したことも、又、周りからそう呼ばれたことも、今のところ同時代の一次資料によって確認できない。先に紹介した元和九年六月五日上洛途上の政宗に宛てた手紙でも、「仙東（仙台東）より」となっており、「東」と称していたこと分かる。周りからは、「お東様」と呼ばれていたのだろう。

また、「花窓久栄」の法名については、既に虎哉和尚から授かっていたことが、高野山にある自身の逆修供養塔（宝篋印塔）によって明らかである。この供養塔は天正十三年十月八日伊達輝宗の死去にともない、義姫が輝宗の供養塔と一緒に建てたものである（**表紙写真**）。輝宗の供養塔には「奥州伊達性山受心居士　天正十三年十月八日」、義姫の供養塔には「伊達女中　花窓久栄　逆修　天正十三年十月八日」と刻まれている。輝宗の戒名「性山受心」[8]は輝宗の葬儀の導師も務めた資福寺の虎哉和尚が授けたものである。義姫の戒名「花窓久栄」も虎哉和尚から授かったものだろう。

これらのことから、「保春院」の院号は清嶽和尚が葬儀の際授けた諡号と考えられる。

更に、この「貞山公治家記録」の記述で注目されるのは、義姫の寿像の存在だろう。寿像には清嶽和尚の賛があったことが分かる。生前の義姫の容姿を知る貴重な資料であるが、覚範寺には今この寿像は伝わっていない。

おわりに

義姫の最晩年、仙台での生活は約十カ月。その内政宗との水入らずのくらしは五カ月に満たない。短期間ではあったが、江戸の愛姫や孫たちとの交流は幸せな時間でもあったのではないか。義姫は羽州探題を務めた由緒ある最上家に生まれ、伊達家に嫁いで政宗を産んだ。「奥羽の鬼姫」[9]などと呼ばれるが、それは誤解であり、実際は政宗の母としての誇りを持ち、生涯伊達家と最上家の安泰を願って奔走し、戦国の世をたくましく生きた女性であった。四百年の時を経て、改めてその生涯が見直されて然るべきと思う。

〔注〕

（1）『大日本古文書　伊達家文書』（以下、『伊達家文書』と略す）十　三二六八号。輝宗自筆の書状と色紙は、政宗自筆の包紙に、さらに忠宗自筆の包紙に二重に包まれている。政宗から忠宗へ引き継がれたことを示している。なお、書状と色紙は『大日本史料』第十一編之二十一　天正十三年十月八日の条にも写真入りで掲載されている。

（2）『仙台市史　伊達政宗文書』（以下、『伊達政宗文書』と略す）三七一八号。

（3）『伊達政宗文書』一三五八号（元和九年二月六日　佐竹右京大夫義宣宛書状）ほか、同一三五九号、一三七一号、一三七八号、二三八一号、二三八三号等に上洛に向けて仙台で待機している様子が窺える。

（4）『伊達家文書』八五三号。

（5）『伊達家文書』八四六号。

（6）角田市文化財調査報告書第五十五集『角田石川家に嫁いだ伊達政宗の次女　牟宇姫への手紙　三』角田市郷土資料館　令和四年三月

（7）同右

（8）「受心」の戒名は、輝宗が隠居した後の文書に見える。例えば伊達輝宗筆「正月仕置之事（天正十二年極月　政宗宛。『伊達家文書』三一九号）。

（9）神坂次郎「奥羽の鬼姫―伊達政宗の母」『戦国を駆ける』所収　中央公論新社

（伊達政宗研究家／元仙台市博物館館長）

博物館とデジタルアーカイブ

佐藤　琴

「デジタルアーカイブ」という言葉は和製英語です。今から約三十年前に月尾嘉男東京大学教授（当時）が考案しました。初めて世に出たのは一九九四年十二月に開催された「世界の文化を未来に継承するデジタルアーカイブ国際会議」。高度情報化社会の始まりを告げるWindows95発売の直前です。

当時、情報技術がもたらす未来に対する期待が関係者のなかで高まっていました。パソコンや通信網などはそれを実現するにはいたっていませんでしたが、情報技術の進化と普及のために、一九九六年四月に文化庁・通商産業省（当時）、自治省（当時）が支援し、関連企業等により「デジタルアーカイブ推進協議会（会長　平山郁夫）」が設立されました。この頃、「源氏物語絵巻」や広隆寺・薬師寺の仏像などの貴重な文化財が最新技術をもちいてデジタル化されました。それによって情報技術の有用性を証明しようとしたのです。

しかし、あまりうまくはいかず、二〇〇五年にはデジタルアーカイブ推進協議会も解散してしまいました。多額の費用をかけてデジタル化しても当時高精細画像を表示できるのは高価なスタンドアローン端末のみ。しかも最新であるがゆえに技術の賞味期限は一瞬。すぐに古びて、次々と新しい技術が生まれます。そのどれが生き残るのかも数年経たなければわからず。二〇一七年にデジタルアーカイブ学会が設立されるまでのおよそ十年間は、試行錯誤を繰り返しながら、私たちの生活にインターネットが浸透していく期間でした。

一九九六年から東北歴史博物館（一九九九年開館）の情報システム構築担当となった私はデジタルアーカイブ推進協議会のシンポジウムなどにも参加していました。その場では、世界中の人々の瞬時にお互いの状況を理解しあえるようになり、世界は平和になるという説明がなされ、私はそれを信じていました。もう一つ当時話題になっていたのは博物館側が非協力的だということでした。博物館側は収蔵資料をネット上で公開してしまうとそれで満足して来館者が来なくなるという強い危機感を抱いていました。しかし、三十年後の現在、ウクライナとロシアの戦争は終わらず、アメリカでは自国第一主義の大統領が当選しました。人々が移動コストをかけてわざわざ見に来るのはネット上で話題になったものであり、来館者は見たものをスマートフォンで撮影してSNSで共有できなければ満足しません。

このように情報技術は博物館とそれを取り巻く人々の価値観を大きく変えました。今後も大きな変化にさらされていくことでしょう。そんな時代だからこそ、私は原点に立ち返る必要を感じています。「アーカイブ」という言葉はそもそも「保存（庫）」という意味です。ヨーロッパにおいては、後世の人々に利用される可能性がある文書を保存し、利用に供する文書館のことをいいます。アーカイブスで保存されるのは貴重な美術作品だけではありません。

インターネットの普及によって保存と利用は必ずしも同じ場所である必要がなくなり、検索によって人間の記憶力をはるかに超えた大量のデジタルデータを扱えるようになりました。その恩恵については私が説明するまでもないでしょう。

博物館が今後も役割を果たしていくためには収蔵資料のデジタル化は不可欠です。しかし、その作業が非常に困難であることも三十年近くこの仕事をしてきた私にはよくわかります。ですから、私が現在携わっている「山形アーカイブ」ではできるところから少しずつ情報を掲載していくこととしています。ただ範囲は広く、山形の過去だけでなく現在の風景や人々の記憶も掲載することとしました。現在は一瞬で過去になりますし、今を生きる人たちにとって大切な思い出ですから。この記憶の蓄積は今だけでなく未来の山形の方々が自分たちのまちの在り方を考える手がかりになるはずです。博物館もデジタルアーカイブもそのために存在すると私は考えています。

（山形大学附属博物館　学芸研究員
・学士課程基盤教育院　教授）

新・最上義光連歌の世界②

生田　慶穂

1　梅さきて匂ひ外（ほか）なる四方（よも）もなし　義光
2　まがきになる、鶯のこゑ　紹巴
3　朝霞きのふはうすき砌（みぎり）にて　昌叱

文禄二年六月十三日賦何人百韻

前回取り上げた文禄二（一五九三）年二月の連歌から数ヶ月後、義光の同じ発句を使って連歌が巻かれた。前回と今回の三句を見比べてみてほしい。前回の脇句は氏家守棟、第三が里村紹巴だが、今回は脇句を紹巴、第三を昌叱が詠む。前回と重なる顔ぶれは義光・紹巴・昌叱・玄仍・景敏・光清の六名、それに堀喜吽・成田氏長ら七名が新たに加わった。

本人が同じ発句を再び使うということ、実はこれがかなり珍しい。芭蕉自賛の「木のもとに汁も鱠も桜かな」を立句に連句が三度興行された他に例を知らない。

義光と紹巴はなぜ新たな発句を詠まずに、同じ発句を使うことにしたのだろうか。文禄二年二月の連歌は義光を願主とする戦勝祈願で、義光・守棟は肥前名護屋に在陣中であったため同席せず、江口光清が使者に立ち、在京の紹巴らに依頼して続きを完成させた。そして今回、名護屋から引き揚げた義光とようやく京で対面することになった紹巴は、無事の帰京を祝って、同じ発句で改めて一座を設けることを提案したのではなかろうか。

ところで、この連歌には武蔵国忍城の城主成田氏長も参加している。氏長は天正十八（一五九〇）年頃から紹巴の指導を受けている連歌好きの武将のひとりだ。氏長も文禄の役では名護屋に参陣していたので、同席者にふさわしいと紹巴が声をかけた可能性が高い。

発句は、梅の花が咲きこぼれ、その匂いの至らない場所はないと述べ、梅の香が辺り一面に漂うさまを詠む。脇句は、梅の香に誘われ山から下りてきた鶯も、我が家の垣根に馴れ、声を立てていると付ける。梅に鶯は定番の取り合わせ。第三は、昨日は薄く立っていた朝霞が、今日は一段と濃く庭に立ちこめ、鶯の姿は見えずとも声ははっきりと聞こえてくると展開した。梅・嗅覚→鶯・聴覚→霞・視覚と、伝統的ながらも多彩な景物と感覚を用いて初春の移ろいを描いている。

なお名子喜久雄氏は、六月興行であれば発句は夏の句のはずで、春の句なのは不審、すなわち誤写ではないかと指摘している（『人文論究』六九）。残念なことに原本は現在行方不明で、その真偽を確かめる術はない。村山市伊藤芳夫氏旧蔵資料として『山形市史　史料編一』に翻刻されて、かろうじて活字の本文が伝わっている状況である。『連歌総目録』によれば文禄二年六月十三日に紹巴は別の百韻に参加している。本連歌の興行年月日には何らかの錯誤があり、文禄二年春から三年春の間の興行と幅をもって考えておくのがよさそうだ。詳細は拙稿「最上義光と里村紹巴の接点―文禄二年のふたつの連歌―」（『日本文学研究ジャーナル』一九）を参照されたい。

（山形大学准教授）

最上義光歴史館サポーター

義光会だより

No.15
2025年３月

題字　齋藤薫石

「いらっしゃいませ。どちらからおいでになりましたか？」「御案内しますか？」などとサポーター明示のネームを下げ、さりげなく声掛けする人が居たら、それが最上義光歴史館サポータークラブ『義光会』のメンバーなのです。

織田信長の『信長記』を『シンチョウキ』と読ませるように、『義光（ヨシアキ）』を『ギコウ』と読ませ、歴史館サポーターとして『来館者に対し最上義光公並びに最上家を軸とした郷土史を紹介することで、山形市の観光振興に寄与する』という一大スローガンの元、平成二十年（二〇〇八）に結成され活動を続けている団体、それが『義光会（ギコウカイ）』なのです。

『義光会』は、サポーターが一丸となって取り組んでいる館内でのお客様への案内のみならず、年間を通し、多感な年頃の四年生を対象にした山形市内各小学校へ出向しての出前講座『こども講座～ヨシアキすく～る』や四月の桜満開時に山形城跡霞城公園で二日間続けて実施される『観桜会』や、十月の『山形まるごとマラソン』には義光や政宗の甲冑出で立ち姿になり、他のメンバーは最上家家紋と最上義光歴史館名を配した幟旗で館外にも繰り出し、県内外から数多くいらっしゃるお客様へ義光及び歴史館のアピール努力を惜しまない。

十月にもう一つある歩行者天国のような所で実施する『街なか賑わいフェスティバル～よしあきフェスタ』のブースに於ても然りである。

歴史好きの会員であるだけに、個人的研鑽は元より、外部講師を招いての勉強会や県内外への最上義光歴史館としての現地研修は毎年必ず行ない、より多くの情報をお客様に提供できるように日頃から努めている。

かつては『歴史秘話ヒストリア』（ＮＨＫ）や『英雄たちの選択』（ＮＨＫＢＳ）などで直接的あるいは間接的に最上義光を取り上げていただき、その度に最上義光等に関心を持たれた多くのお客様が県内外のみならず、台湾・中国。アメリカなどの諸外国から来館してくださりニューメディアの凄さに驚く。

『歴史秘話ヒストリア』では井上あさひアナが直接取材来館撮影が行なわれたし、俳優やタレントの方々が一般人の方々の振りをして来館されているのをお見掛けする。

過去におけるＮＨＫ大河ドラマ（『独眼竜政宗』で義光の余り良くないイメージを持ったまま来館されるお客様も多々いらっしゃるが、御案内の中でそのようなイメージをいくらかでも払拭してお帰りになっていただけるのは実に喜ばしいことである。

近年に於ては『ブラタモリ～山形』（ＮＨＫ）や『歴史探偵』最上義光（ＮＨＫ）などで最上義光を大きく取り上げていただいた。

こうしたことは地道に活動している『義光会』にとって活動のやり甲斐のある救いだ。

どうしても伊達六十二万石の礎を築いた甥の伊達政宗と比較されてしまうのは致し方ない。

義光から数えて三代目で義光が一代で運よくも築き上げた五十七万石からたったの一万石に改易され、更には半分の五千石で幕末を迎える最上家。

義光は『慶長出羽合戦』という多くの犠牲者を出した戦いを経て庄内方面等の領地を貰ってからの短い年数の中で中興の祖と言われる多くの事業を成し遂げ、霞城公園の騎馬像姿として顕彰されるまでになった。

現在は近代化された様々な物で開発も容易になり、道路区画や街並も年々変わりつつある。

『義光会』はこうした世の変遷の中でもこれからも地道にお客様との関わりを続けて行きたい。

この所『最上義光を主人公に大河ドラマを』と頑張っくださっている団体もある。

いずれ実現したならば実に喜ばしい。

人生は実力だけでは乗り切れない。運に左右されることの方が多々ある。

伊達家は伊達家なりに運もあり様々な難局を乗り切れた。

最上家がずっと山形を治めていたならば、と考える人は少なくない。

最上義光は血脈づくりの失敗なのか？

今度は『偉人・敗北からの教訓』（ＢＳ11）で最上義光を是非取り上げていただき、ベテラン伊藤潤氏の繊細な解説で義光の姿を読み解いて欲しい。

（最上義光歴史館サポータークラブ『義光会』
会長　最上 喜男）

〈特別寄稿〉

山形・山寺・最上義光（位牌）の御霊屋について（後編）

伊藤藤夫

御霊屋内部に納まっている厨子は、「向唐破風造」全面黒漆塗りで、正面に両開き板扉がある。厨子に次の木造位牌十柱がある。

厨子

厨子の内部

・最上義光・最上家親・長岡但馬守・山家河内守・寒河江肥前守・寒河江十兵衛・山野辺義忠・山野辺義致・山野辺義堅・清夢覺の十柱である。

最上義光御霊屋の建築から現在に至る経緯を見てみると、次のように考えられる。

元和三年（一六一七）七月十六日の「立石寺・山中日帳」に、「御庵室」と記されていること。炭素年代測定の結果、御霊屋は最上義光没（慶長十九年（一六一四）正月十六日）後三年以内、遅くとも元和三年（一六一七）以前には建てられていたと思われる。御霊屋建立者は義光の跡を継いだ家親で、元和三年三月六日に没している。家親が御霊屋の完成を見たか否かは分からないが、御霊屋建立を計画したのは家親と考えるのが妥当であろう。さて、高野山の最上家供養の五輪塔の地輪には次のような刻銘があって、十二代の山形城城主最上家親が父義光のため造立した。

「羽州ノ大守、最上山形前ノ少将源朝臣義光、昌国寺殿玉山白公大居士菩提ノ為、大施主出羽国最上山形駿河守源朝臣家親、先考ノ為也、　敬白
時ニ慶長十九年甲寅正月十八日」

また、炭素年代測定の結果、御霊屋背面の壁板・舟肘木は柱より若干新しいことから、最上義光の三十三回忌は一六四六であるので、これに合せて大改修が行われた可能性がある。最上家は元和八年（一六二二）国替えされているので、誰が大修理を行ったのであろうか。

山野辺義忠は寛永十年（一六三三）水戸家に一万石の家老として召し抱えられており、最上義光の子息の中で最も経済的に可能であろう。山野辺義忠と御霊屋との拘わりはこのことが起因しているのではないだろうか。

建築史学からみても、江戸時代に入ると日光東照宮などにならい全国の大名が御霊屋を建てるようになった。江戸時代初期の御霊屋はあまり残っていない。この時代の大名がどのような葬儀をしていたのかわかる学術的にも貴重な資料である。今後は、立石寺様をはじめ関係各位のご協力を賜りながら、計画的に修復する必要があると思う。

位牌：最上義光（中央）
長岡但馬守（左）、最上家親（右）

〈参考文献〉
一、日本建築学会東北支部研究報告集
計画系第七八号

（山形霞城郷土史研究会会長、最上義光歴史館サポータークラブ「義光会」会員、位牌が納められている忠臣の子孫）

表紙の写真

伊達輝宗供養塔と義姫逆修供養塔

写真提供／仙台市・保春院

高野山（和歌山県）にある伊達輝宗供養塔と義姫逆修供養塔です。

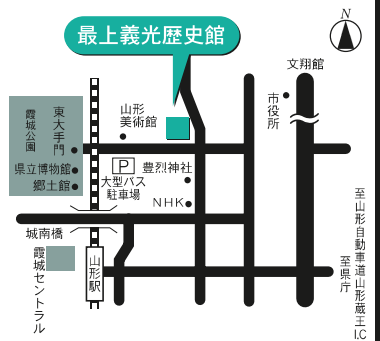
天正十三年（一五八五）十月八日非業の死を遂げた夫の伊達輝宗のために、妻の義姫が建てた供養塔（左）と一緒に建てた自身の逆修供養塔（右／宝篋印塔）です。四百年以上経過した現在も仲睦まじく並んで立っています。

佐藤憲一先生には『歴史館だより№30』から三号続けて最上義光の妹で伊達政宗の実母である義姫（保春院）についてご寄稿いただきました。

ご利用について

開館時間　午前9時から午後4時30分
入館料　無料
休館日　月曜日（国民の祝日となる場合はその翌日）
12月29日から1月3日
交通　JR山形駅より徒歩約15分
大手町バス停留所より徒歩1分

来館案内図



令和7年3月発行
編集・発行　公益財団法人山形市文化振興事業団
最上義光歴史館
〒990-0046
山形市大手町1-53
℡ 023-625-7101
FAX 023-625-7102
http://mogamiyoshiaki.jp
印刷　株式会社大風印刷